神海丸航海日誌

SHINKAIMARU'S
LOG-BOOK

関　蒼太朗
SEKI SOUTARO

HAMADA FISHERIES HIGH SCHOOL

巻頭言

「神海丸航海日誌」の発行にあたって

関　蒼太朗

遠洋航海が終わってから約二ヶ月が経ちました。

約二ヶ月に及ぶ非日常の日々は終わりを告げ、勉強に勤(いそ)しむいつもの日常が戻ってきました。

人間(ひと)というものは、不思議なもので、たった二ヵ月しか経っていないにも関わらず、船上での暮らしが遥か遠い過去の事のように思えるのです。

しかし、今この冊子を開いている間だけは、過ぎ去った日々をありありと思い出し、太平洋へと還ることができるのです。

本書は、洋上での日々を、私、関蒼太朗が書き留め、中国新聞さんに寄稿していた記事の総集編です。

神海丸での実習の様子や生徒達の暮らし、船上での空気感等をお伝えできていると思います。

しかしながら、この冊子に掲載されていることはごく一部に過ぎません。本当はもっと沢山の出来事がありましたし、様々な理由で掲載されなかった記事もあります

けれども、それを全て伝えるのはどだい無理な話ですし、何よりその全てを知ることができるのは、実習に参加した皆(みな)の特権であり、本乗船実習の醍醐味であると思います。

さて、実は本連載は本来もっと小規模なものに終わるはずでした。それがここまで大きくなったのはひとえに中国新聞さんのご厚意と読者の皆様から頂いた反響のお蔭に他なりません。私が無計画に大量の記事を送りつけた時も、電子版で公開するなど柔軟な対応をして下さいました。本当に感謝の気持ちで一杯です。

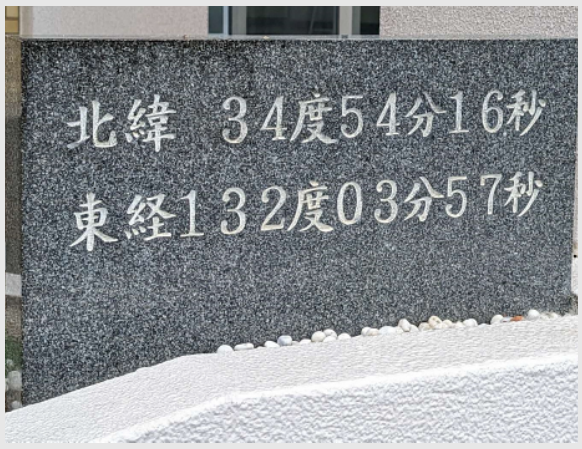
本書を読んだ学生が浜田水産高校の門戸を叩き、神海丸で学ぶようなことがあれば、これ以上の幸せはありません。また、本書が私達の後に続く多くの学生にとっての道標(みちしるべ)となることを切に願います。

最後になりましたが、本企画にたずさわった全ての方、特に中国新聞浜田支局の黒田さんに深く感謝申し上げます。

令和六年五月

島根県立浜田水産高等学校にて

北緯34度54分　東経132度03分



水産練習船「神海丸」航海記録

令和5年度　第二次マグロ漁業実習

目次

❶実りある航海へ、いざ出港　1月18日・・・・・・・1
❷船酔い地獄、染みる優しさ　1月21日・・・・・・・2
❸はえ縄実習、プライスレス　1月25日・・・・・・・3
❹気になる日付変更線の色　1月29日・・・・・・・4
❺操業開始、生命の海を体感　1月31日・・・・・・・5
❻「えひめ丸」犠牲忘れない　2月10日・・・・・・・6
❼船乗りを導く、満点の星　2月12日・・・・・・・7
❽漁最終日、沸き立つデッキ　2月14日・・・・・・・8
❾デッキを磨けば入港目前　2月16日・・・・・・・9
❿実習船仲間に思わず敬礼　2月18日・・・・・・・10
⓫戦艦ミズーリで考えた　2月20日・・・・・・・11
⓬伝統のタコ漁具に親近感　2月21日・・・・・・・12
⓭夢見心地の出港、帰路へ　2月22日・・・・・・・13
⓮ただいま「東経」の世界　2月26日・・・・・・・14
⓯船を動かす機関部に圧倒　2月27日・・・・・・・15
⓰帰国　何とも言えぬ安心感　3月　7日・・・・・・・16
⓱2ヶ月の航海　名残惜しい　3月13日・・・・・・・17
あとがき「学生記者の活動は人生の財産」　・・・・・・・18
番外編「ハワイ航海実習人生の糧」　・・・・・・・20

※この冊子は、中国新聞に掲載された記事を元に編集・加工したもので、オリジナル記事とは異なる部分があります。

神海丸航海日誌

SHINKAIMARU'S
LOG-BOOK

関　蒼太朗
SEKI SOUTARO

出典　2024年1月27日付け中国新聞掲載

実りある航海へいざ出港

水高記者 DIARY

第一号

1月18日

北緯34度1分
東経130度53分

水高記者
関　蒼太朗

県水産練習船「神海丸」に乗り込み、ハワイ沖で実習に取り組む浜田水産高(浜田市)海洋技術科2年生、関蒼太朗さん(17)＝広島市中区出身＝が船上の日々を記します。

今日はいよいよ出港式。事前の慣らし航海を経て太平洋へと船出する日になりました。私の役目は実習生代表としてのあいさつ。後援会や来賓の方々がお越しになり、報道各社の取材もあるため、責任重大です。

出港式が始まると、県教委の方や校長先生が激励の言葉をくださり、次第に私のあいさつが近づいてきます。緊張で手は震え、頭の中では何度も原稿を読み直しますが、不安は拭い切れません。ついに名前を呼ばれ、マイクの前にたつと、吹っ切れたのか、すらすらと文章が出てきました。こう見ると、緊張と船酔いは似ているのではないでしょうか。

つらいのは吐くまで。あとはなるようになる。

何とかあいさつを終え「自分にしてはよくやったかな」なんて思いながら列に戻ると、わずかですが、家族と話せる時間がありました。私の母は会場に着いた時から涙を流し、うれしいやら悲しいやら。私までつられて涙ぐんでしまいました。周りをみれば、泣いている顔、笑っている顔さまざまでしたが、皆希望に満ちた顔だったように思います。

しかし、その時間も終わり、名残惜しいですが、船へと戻りました。そして見送りに応えるべく、甲板に並んで手を振りました。次に浜田に戻ってくるのは2ヶ月後の3月14日。その頃には桜が咲いているなんて、ちょっと信じられません。あらためて、この航海の長さを実感します。

最後に、今日のあいさつから一部を引用したいと思います。

「既に私たちは、8日間を(県水産練習船)神海丸で過ごし、その間に驚くべき成長を遂げ始めています。しかし、まだ克服すべき点が多いのも事実です。ですが私たちは、それが乗り切れるものであると信じています」

私たちの航海が、どうか実り多いものでありますように。

出典　2024年2月3日付け中国新聞掲載

水高記者DIARY

第二号

1月21日

北緯28度23分
東経143度10分

船酔い地獄、染みる優しさ

県水産練習船「神海丸」に乗り込み、ハワイ沖で実習に取り組む浜田水産高(浜田市)海洋技術科2年生、関蒼太朗さん(17)＝広島市中区出身＝が船上の日々を記します。

浜田を出港して3日目です。現在神海丸は、小笠原諸島の父島北東約95カイリ（175キロ）にいます。亜熱帯に差しかかり、気温は21度と初夏並みの暖かさです。

おとといの関門海峡を通過しました。太平洋へとこぎ出した私たちを待ち受けていたのは冬の低気圧でした。西高東低、理科で習った知識を身をもって実感することに。瞬く間に船内はゾンビのような顔色の生徒であふれかえりました。まさしく地獄絵図。先生の「こんなのはまだ、なぎのうちだぞ」という言葉に一同血の気が引きました。

一日たつと、ある程度ましになったものの、授業で教科書の文字を見ていると酔い、そのまま突っ伏す生徒が続出。結局授業時間を大幅に繰り上げる事態になりました。

しかし、クラスに何人か全く酔わない人がおり、酔って動けない人の食事当番や掃除を手伝ってくれました。

印象的だったのは、お調子者で知られる生徒がダウンした生徒の穴を埋めるよう自発的に動いていたこと。私も彼には何度か助けられました。そんな心優しい人たちの活躍もあり、20日の夜は無事に更けていきました。

21日。太平洋も3日目となると、徐々に体も慣れてきて、午後は本が読めるくらいまで回復しました。皆で船上に出る機会があり、どこまでも広がる水平線を見ながら潮風を浴びていると、泥のようだった皆の顔色に生気が戻ってきました。授業も予定通り行われ、新しい日常へ向けた準備が進みつつあります。

あすからはうねりも落ち着き、文字通り「太平の海」になるそうです。そして今夜午前0時、時差の修正のため時計が30分進みます。睡眠時間が30分減るということ。今日は早く寝る必要がありそうです。

出典　2024年2月6日付け中国新聞掲載

水高記者DIARY

第三号

1月25日

北緯28度9分
東経164度21分

はえ縄実習、プライスレス

県水産練習船「神海丸」に乗り込み、ハワイ沖で実習に取り組む浜田水産高(浜田市)海洋技術科2年生、関蒼太朗さん(17)＝広島市中区出身＝が船上の日々を記します。

浜田を出港してから1週間がたちました。太平洋に入り、既にほぼ全員が船酔いから回復。スマートフォンの電波は届かなくなり、夕食後の食堂はボードゲームを楽しむ生徒でにぎわうようになりました。

今回は、これから実習するマグロはえ縄漁について少々お話ししていきたいと思います。

はえ縄とはどのような漁法なのか。簡単に説明すると、幹縄という太く長い縄と、幹縄に取り付けた無数の細い針付きの縄、枝縄（通称ブラン）を海に沈めます。魚がかかるのを待って引き上げると、たくさんの魚を上げられるという寸法です。枝縄の餌に魚が食いつく様子は、さながらパン食い競争です。

もう少し詳しく見ていきましょう。幹縄には沢山のブイが等間隔で取り付けられており、ブイとブイの間を一鉢と呼びます。一鉢は約５００メートルあり、間には13本の枝縄が取り付けられています。枝縄にはいくつか種類があり、決まった間隔で混ぜて使います。

仕掛け全体では１３０鉢あり、その長さはなんと約70キロメートル！これは浜田―大田間に相当します。その間にぶら下がる針は約１７００もあります

これだけの針を仕掛けるのだから、さぞ多くの魚が捕れるのだろうと思いきや、実際に上がってくる魚は約1トン。40～60キロのマグロ20匹分程度です。

すべてが利用できるわけではありません。市場価値の低い魚もあり、せっかくかかっても途中でサメやシャチに食べられてしまうことも。

とはいえ、操業全体ではなかなかの漁獲量になりますし、何よりその中で得られる知識と経験はまさしくプライスレス。きっと私達にとってもかけがえのない経験となることでしょう。

また、市場価値が低く、店頭であまり見かけない魚に出会えます。私のような魚好きにとっては神秘の宝庫です。

出典　2024年2月10日付け中国新聞掲載

気になる日付変更線の色

水高記者DIARY

第四号

1月29日

北緯15度7分
西経179度55分

県水産練習船「神海丸」に乗り込み、ハワイ沖で実習に取り組む浜田水産高(浜田市)海洋技術科2年生、関蒼太朗さん(17)＝広島市中区出身＝が船上の日々を記します。

浜田を出港してから11日目になりました。お気付きの方もいらっしゃるかもしれませんが、今回は西経179度55分からお送りしています。つまり、私たちは日付変更線を越えたのです。

日付変更線を越えたことで、船内と日本の時差もプラス3時間からマイナス21時間へ。ゆえに今回は現地時間の1月28日に書いていることになりますが、分かりづらいと思いますので、今後は特に断りのない限り日本時間で書いていきます。

今日は操業開始をあさってに控えて、船内の大掃除がありました。普段手が回らない天井や壁も隅々まで磨き上げられ、心なしか空気までできれいになった気がします。

しかし、個人的な問題が一つ。それは友達に比べて筋力がないことです。天井を磨けば肩が凝り、荷物を持ち上げるのにも一苦労。挙げ句の果てにはロープを留めるクリップに苦戦する始末。

このままではいけないと思い、学習時間後から夕食までの休憩時間を利用して上甲板で行われている筋トレ教室に参加することにしました。教室は先生主導で開かれ、生徒たちが自発的に参加するシステムです。

ウオーミングアップの腕立て伏せで腕はぷるぷる震え、一通り終わるころには体全体ががくがくに。しかも自分の腕立て伏せのやり方が間違っていることが発覚しました。正しくやると、体を持ち上げることすらできません。「自分の貧弱さにがくぜんとしました。」

友達の言葉が印象に残っています。「筋トレは競争相手のいない完全な個人勝負だよ。1回でも多く自分を磨いてやろうと頑張れば、次の日には筋肉痛がきて、確実な成果に変わるから」

もうひとつ今日のエピソード。先生がこんな事を言いました。「日付変更線がどんな色か知っているか。本当に線が見えるんだよ。うそだと思うなら見てみればいいさ」

夕方、甲板に出ました。美しい夕空が広がっていました。入道雲と大きな海鳥も。日付変更線がどんな色かは、あえて書かないことにします。気になる方はご自分の目で確かめることをお勧めします。来たれ神海丸！

出典　2024年2月17日付け中国新聞掲載

操業開始　生命の海を体感

水高記者DIARY

第五号

1月31日

北緯12度31分
西経176度38分

県水産練習船「神海丸」に乗り込み、ハワイ沖で実習に取り組む浜田水産高(浜田市)海洋技術科2年生、関蒼太朗さん(17)＝広島市中区出身＝が船上の日々を記します。

浜田出港後13日目になりました。きょうはいよいよ操業開始。生活スタイルも一新し、早い人は朝5時から作業を始め、遅い人は午前0時以降に寝ることになります。とはいえ、1人当たりの作業はほとんどが3～4時間。意外と自由時間があります。

私の最初の仕事は揚縄（あげなわ）で、午後2時半から4時間、はえ縄の仕掛けを回収します。縄を揚げる作業は船員さんたちの仕事。私たちは、釣れた魚や引き揚げた枝縄の処理です。

生徒のかけ声で操業開始。10分たった頃、最初の魚、カマスサワラが揚がってきました。外洋性サワラの仲間で、カマスのように長いあごととがった歯が特徴です。

程なく、マグロが次々と揚がり始めました。メインはキハダマグロやメバチマグロ。回転ずしでもおなじみの魚です。

釣れたマグロは船員さんが締めて、私たちの出番になります。まず、体長を測り、船橋に報告。えらへホースを突っ込んで血抜きをします。うまくいけば胴体に入れた切れ目や尻尾を切り落とした場所から血が噴き出し、やがて透明になります。卵の重さを量ったり、背骨を洗ったりと多くの作業を経て、食用処理します。

簡単そうですが、やるとなかなか大変です。特にマグロはまとまって釣れることが多いため、甲板は大忙し。しかし、生徒の作業はほんのわずかに過ぎません。船員さんたちは右へ左へ走り回りながら多くの仕事をこなしています。船員さんたちの大変さや頼もしさを間近で体感できます。

今日の操業はかなりの大漁でした。あまりに魚が釣れてしまい、作業の終了は予定より1時間以上遅れてしまいました。

そして、今日、私は心底魚が好きなのだと実感しました。生命エネルギーの塊のような魚たちや、それを生かしている海に対して抱いた畏敬の念は生涯忘れることはないでしょう。

作業を終えた私たちを待っていたのは晩ごはん。特に今日釣れたばかりのカツオの刺し身は絶品でした。疲れたものの、その分楽しい一日でした。明日からも精いっぱい頑張っていきたいです。

出典　2024年2月21日付け中国新聞掲載

「えひめ丸」犠牲忘れない

水高記者DIARY

第六号

2月10日

北緯12度53分
西経173度10分

県水産練習船「神海丸」に乗り込み、ハワイ沖で実習に取り組む浜田水産高(浜田市)海洋技術科2年生、関蒼太朗さん(17)＝広島市中区出身＝が船上の日々を記します。

浜田出港後23日目。(慣らし航海で隠岐の島町へ行くため)1月10日に神海丸へ乗り込んで、気付けば1カ月たちました。もはやこの生活が日常になり、夢の中もだんだん神海丸のことが増えてきたように思います。ハワイまであと9日、皆胸を膨らませて観光の計画を立てています。

さて、今日は少し真面目な話をしなければなりません。2月10日は私たち水産高生、ひいては海に関わる者にとって忘れてはならない日なのです。

2001年の今日、ハワイ諸島オアフ島の沖で愛媛県立宇和島水産高の実習船「えひめ丸」が米海軍の原子力潜水艦「グリーンビル」と衝突しました。

「えひめ丸」に乗船していた35人のうち9人の命が奪われ、生還した方々の多くも身体的・精神的な後遺症に苦しむこととなりました。記憶に残っている方も多いのではないのでしょうか。

友と語らい、実習に励みつつ日本に帰ることを夢見る日々。そんな日常を突如打ち砕かれた被害者の苦しみはいかほどだったでしょうか。「無事で帰ってきてほしい」。そんな願いを打ち砕かれた保護者の苦しみはいかほどだったでしょうか。私たちには想像することしかできません。

事故の原因は「グリーンビル」搭乗員の安全確認不足と当時の艦長の判断ミスにあったと言われています。人為的なミスが人命を奪う、まさしくあってはならない事故だったのです。

将来船に乗る者も多い私たちにとって、これは決して人ごとではありません。

私たちは被害者の方々と同じ志を持つ者、そして日本の海運、漁業を担う者としてこの事故を永遠に風化させてはならないのです。今日、船内で「えひめ丸」と犠牲になった方々に1分間の黙とうをささげました。皆の心が届いていることを切に願います。

最後になりましたが、犠牲となった9人の方々、そして深海で眠り続ける「えひめ丸」のご冥福をお祈りします。どうかその眠りが妨げられるようなことがありませんように。

出典　2024年2月28日付け中国新聞掲載

船乗りを導く、満点の星

水高記者DIARY

第七号

2月12日

北緯14度44分
西経165度6分

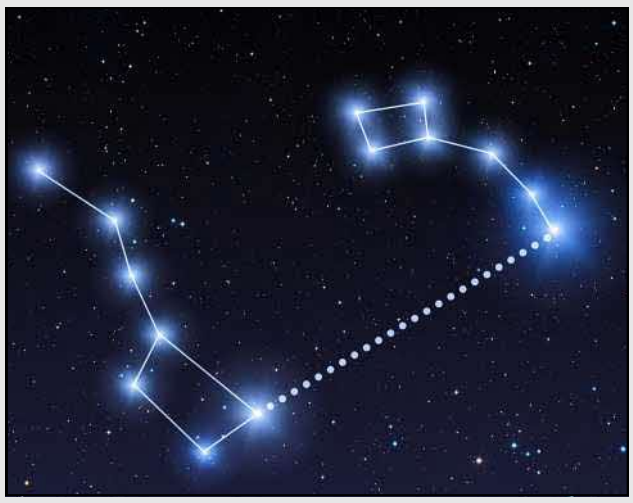
県水産練習船「神海丸」に乗り込み、ハワイ沖で実習に取り組む浜田水産高(浜田市)海洋技術科2年生、関蒼太朗さん(17)＝広島市中区出身＝が船上の日々を記します。

浜田出港後25日目です。操業も残り2日になり、いよいよこの航海の終わりが見えてきました。とはいっても、まだ1カ月の猶予があり、皆この時間をどう使うべきか、真剣に悩んでいます。

今回は貴重な体験について書きます。昨日ある生徒がこんな提案をしました。「明日の早朝、皆で星を見に行かないか。新月だから星もきれいに見えると思う」。

そしてけさ4時、眠い目をこすって食堂に行くと、先客が5人いました。その後2人合流し、合計8人となかなかの人数が集まりました。専攻科生の取り計らいで、このような時間ですが、デッキに出られました。

付き添いのチョッサー（1等航海士）がガイドをしてくださり、素晴らしい星空を見ることができました。これから紹介するのは、その中でも印象的な星座です。



まず、北の空に連なる七つの星、北斗七星です。北斗七星はおおぐま座を構成する星の一部で、おおぐま座の尻尾およびその付け根付近に当たります。

北斗七星はひしゃく型の星座。その先端にある二つの星、その間隔を5倍のばすと、古くから多くの船乗りを導いてきた北極星が見つかります。ちなみに、チョッサーいわく、この方法は海技士試験で出題されることがあるそうです。

振り返って南の空を見ると、ちょうど北極星の真逆に南十字星が見えました。日本では南西諸島や小笠原諸島でないと見えない星座。あらためて遠い所に来たのだなと実感しました。

南十字星の近くには、偽十字星と言われる星座がありますが、南十字星の方がきれいな十字架となっています。船を導く美しい十字架。かつての船乗りが祈りをささげたのもうなずけます。

そして、南十字星の左側にひっくり返ったさそり座が見えました。さそり座もまた、南の目印として船乗りに知られていた星座です。他にも多くの星座・星が見えたのですが、全て紹介し切れません。今回はここまでとしましょう。

出典　2024年3月5日付け中国新聞掲載

漁最終日、沸き立つデッキ

水高記者DIARY

第八号

2月14日

北緯15度57分
西経163度19分

県水産練習船「神海丸」に乗り込み、ハワイ沖で実習に取り組む浜田水産高(浜田市)海洋技術科2年生、関蒼太朗さん(17)＝広島市中区出身＝が船上の日々を記します。

浜田出港後27日目です。今日はいよいよ操業最終日、千秋楽となりました。神海丸では慣例として、この日は音楽を流します。太平洋にJ-POPを響かせて漁をする実習船。はたから見れば少々異様な光景だったかもしれません。

慣れた操業も、音楽が流れると一気に雰囲気が変わります。ある曲ではデッキが沸き立ち、ある曲では皆がしんみりと聞き入り、普段以上の能率で作業しました。

能率の高さには実はもう一つ理由があります。最後の操業だからと、この日の操業担当ではない多くの生徒がボランティアとして参加し、ほかの人の作業を手伝っていたのです。皆の優しさが垣間見える瞬間でした。

私の役目は揚縄当直。最終日の当直は普段より難しいと言われています。音楽の流れる環境でデッキからの報告を聞き取ったり、復唱したりする必要があり、いつも以上の声量と集中力が必要になるためです。

しかし、元々当直の仕事が好きだったこともあり、大変だけど楽しい時間でした。

この14日間、長いような短いような、しかし、終わってみれば確かに短い時間でした。

明日からはいよいよハワイへ向けて航行し、18日にはホノルルに入港します。しかし、明日からの4日間は大掃除や上陸前テストと予定が詰まっています。この大仕事をこなすためにも、今日はここまでとしましょう。

出典　2024年3月12日付け中国新聞掲載

デッキを磨けば入港目前

水高記者DIARY

第九号

2月16日

北緯21度10分
西経157度56分

県水産練習船「神海丸」に乗り込み、ハワイ沖で実習に取り組む浜田水産高(浜田市)海洋技術科2年生、関蒼太朗さん(17)＝広島市中区出身＝が船上の日々を記します。

浜田出港後29日目です。

現在私たちは操業を終え、ハワイへ向けて回航中です。昨日の午後からオアフ島が見えていて、今日はホノルルの市街地が見えるほどに接近しました。ここから一夜漂泊し、翌朝入港する予定になっています。

入港準備の一貫として、昨日と今日、大掃除をしました。大まかな流れは1月の終わりと同じですが、今回はデッキの清掃「ヤシ擦り」が加わります。

名前の通り、洗剤と研磨用の砂をまいたデッキを、二つに割ったココヤシ(ヤシの実)の殻で磨き上げます。これがかなりしんどい。体重をのせて床を擦り続けるため、手や腕はもちろんのこと、徐々に全身が疲れてきます。

デッキをこすり続けること約3時間、真っ黒な泡を流すときれいな木目が現れました。その美しさは確かな達成感を感じるものでした。

作業が終わった後、デッキに出てみると携帯の電波が届き、間もなく画面に通知が次々と表示されました。一ヶ月分の通知をさばき終えた後、家族と久しぶりの連絡を交わすことができました。

家族と話せたことで、私の心はかなり安らぎましたが、ちょっとだけ日本を恋しく感じた、そんな時間でした。

明日は入港ですが、本格的にハワイの町を歩けるのはあさってから。

ただ、陸と町が見えるだけで人の心は安らぐもの。

今日はいつもよりゆっくりと休めそうです。

出典　2024年3月19日付け中国新聞掲載

実習船仲間に思わず敬礼

水高記者DIARY

第十号

2月18日

北緯21度19分
西経157度53分

県水産練習船「神海丸」に乗り込み、ハワイ沖で実習に取り組む浜田水産高(浜田市)海洋技術科2年生、関蒼太朗さん(17)＝広島市中区出身＝が船上の日々を記します。

浜田出港後30日目。ついに今日、神海丸はホノルルに入港しました。

午前6～8時、私は当直で船橋にいました。ホノルルがあるオアフ島はすでに多くの明かりがともり、キラキラと輝いて見えました。すると、前方から何やら光が。双眼鏡で見ると船のようです。

AIS(船舶自動識別装置)で確認すると、何と、千葉県の実習船「千潮丸」でした。近くには高知県実習船「土佐海援丸」の姿もあったそうです。

ハワイで志を同じくする人たちと出会えたことはどこか心強く、感慨深いものがありました。

そして、7時ごろだったでしょうか、神海丸はホノルル港へ航行を始め、9時半には港の案内人パイラーが乗船しました。

パイラーは、パイロットボートという小型船で接舷し、縄ばしごから上がってきて、その姿がとてもかっこいい。神海丸にピタリと接舷し、そのまま、するっと離れていく技術に息をのみました。

程なくしてホノルルの町並みが見え、発展度と異国情緒に胸が高まってきます。空を見上げれば多くの飛行機がひっきりなしに飛び交い、カラフルな色合いのパラグライダーが海へと向かう様子は、まさしくハワイここにありといった感じ。港を行き交う船も、豪華客船からヨットまでさまざまですが、どこか日本のものとは異なる雰囲気をまとっていました。

いよいよ神海丸が停泊場所に到着するころ、先に入港していた土佐海援丸と擦れ違いました。甲板にいらっしゃった船員さんたちにあいさつの意味を込め「敬礼」の号令が響き渡りました。

皆一斉に敬礼をすると、土佐海援丸の方から「素晴らしい！」とお褒めの言葉をいただきました。

入港後は上陸説明と非常操舵(そうだ)操練を終え、いよいよハワイ初上陸です。

出典　2024年3月26日付け中国新聞掲載

水高記者DIARY

第十一号

2月20日

北緯21度59分
西経157度53分

戦艦ミズーリで考えた

県水産練習船「神海丸」に乗り込み、ハワイ沖で実習に取り組む浜田水産高(浜田市)海洋技術科2年生、関蒼太朗さん(17)＝広島市中区出身＝が船上の日々を記します。

浜田出港後32日目。今日はハワイの名所をバスで巡ります。

まず訪れたのはえひめ丸の慰霊碑。以前紹介したとおり、愛媛県立宇和島水産高の実習船で、２００１年にハワイ沖で事故にあい沈没しました。碑は事故の概要や犠牲となった方々の名前を記し、えひめ丸の遺品であるいかりも置いてあります。事故現場である海を見ながら黙とうしました。

次は誰もが一度は写真を見たことあるであろうカメハメハ大王像です。皆で並んで写真を撮ろうとした時、通りすがりの婦人がそれとなく列に混ざり、まさかの(1人多い)30人で写真を撮ることになりました。

続いて向かったのはモアナルア・ガーデン。日立のCMに出てくる「この木なんの木」の木がある場所です。私は園内の川を見に行ったのですが、ティラピアとプレコ、それからボラしか見つけることができませんでした。

さらに30分ほど移動し戦艦ミズーリ記念館へ。実は一度来てみたい場所でした。ミズーリはアイオワ級戦艦の3番艦で、第2次世界大戦を始め、朝鮮戦争や湾岸戦争にも出動した、まさに「世界最後の戦艦」です。太平洋戦争で日本側が降伏文書にサインしたのもこのミズーリの艦上でした。

多くの展示が私の興味をひきましたが、一番印象に残ったのが１９４５年の沖縄戦で特攻機が突っ込んだ跡でした。この跡は戦争が持つ狂気を如実に語っていました。

ミズーリも多くの命を奪った凶器。私は武器が人を殺すのではなく、人が人を殺すのだと信じています。ですが、ミズーリに突っ込んで命が奪われたという事実は、本当にその考えが正しいのかと問いかけてきました。

いつの日か、答えを出すことができれば、またこの場所に戻ってきたいです。

その日までこの艦が残されていることを願います。

出典　2024年4月2日付け中国新聞掲載

水高記者DIARY

第十二号

2月21日

北緯21度59分
西経157度53分

伝統のタコ漁具に親近感

県水産練習船「神海丸」に乗り込み、ハワイ沖で実習に取り組む浜田水産高(浜田市)海洋技術科2年生、関蒼太朗さん(17)＝広島市中区出身＝が船上の日々を記します。

浜田出港後33日目。今日私が向かったのはビショップミュージアムという博物館です。ハワイの生態系や地理、歴史などについて深く学ぶことができます。

複数の棟があり、私が最初に入ったのは子ども向けの科学館。しかし、内容は幼稚なものではなく、視覚的な展示と平易な英語で要点をわかりやすくまとめており、英語が得意ではない私でも難なく理解できました。

メインの展示があるのはハワイ王国時代の建物を利用した棟。

入ってしばらく歩くと中央ホールに出ます。目の前に現れたのは多くの魚の剥製、さらには巨大なマッコウクジラの模型でした。その迫力は、思わずため息が出るほど。この模型は裏に回ると本物の骨格標本になっています。

館内の展示はどれも興味深く、できるなら覚えているすべてを書き出してしまいたいのですが、今回はぐっとこらえて、一つ印象に残っている物を書いておきます。

ハワイの伝統的な漁業に関する展示の一角に、それはありました。仕組みはとても単純で、棒にタカラガイの貝殻と、骨のフックがついただけ。最初は何に使うのかと思いましたが、説明の「Octopus Lure（タコ用ルアー）」という文字を見た時、思い出しました。

それは日本のテンヤという仕掛け。同じようにタコを引っかけて捕ります。まさかハワイにテンヤがあるとは。そこから急に親近感が沸いた気がします。

明日はいよいよホノルル最終日。神海丸は日本の三崎港に向けて出港します。

私たちの長い船旅も残り20日少々。この時間を無駄にすることのないよう気を引き締めていきたいです。

出典　2024年4月6日付け中国新聞掲載

水高記者DIARY

第十三号

2月22日

北緯21度59分
西経157度53分

夢見心地の出港、帰路へ

県水産練習船「神海丸」に乗り込み、ハワイ沖で実習に取り組む浜田水産高(浜田市)海洋技術科2年生、関蒼太朗さん(17)＝広島市中区出身＝が船上の日々を記します。

浜田出港後34日目。ハワイでの研修も今日で終わりです。これからは日本の三崎港（神奈川県三浦市）を目指し帰路に就くことになります。

最終日は午後1時までに戻ってこなければなりません。中にはアラモアナショッピングセンターまで行った猛者もいるそうですが、私にはそんな度胸はありません。

岸壁からそう遠くないパン店でロールパンとミートローフを買ってそそくさと帰ってきました。主食とおかずになるものがそれくらいしかなく、ほとんど菓子パンだったからです。味は最高なのですが、いかんせん量が多い。さらに全体的に脂肪分も多め。友達にあげてもまだ残っていて、どうしたものかと悩みました。

そして、とうとう出港の時が訪れました。岸壁の管理人さんと、いつも気さくに話しかけてくださったセキュリティーガードのコノさんが見送りに来てくれました。

私たちはご厚意に敬礼で応え、手を振って別れを惜しみました。岸壁を離れ、小さくなっていく街並みを見ていると、何だか夢を見ているような気がします。今、肩を揺らされて目が覚めたとしても、私は納得してしまうでしょう。それほど濃い非日常の日々でした。

最後に船を出港させたパイラーの方がボートで帰っていくのを見送っていた時、海面にウミガメが現れました。私たちを見送るようなその姿に、甲板からは歓声が上がりました。

こうして5日間のハワイの思い出は、終わりを迎えたのでした。

正直、反省がなかったわけではありませんし、やり残したこともあります。でも後悔はしていません。今はこれからの航海をやり遂げることに目を向けていきたいです。

出典　2024年4月11日付け中国新聞掲載

ただいま「東経」の世界

水高記者DIARY

第十四号

2月26日

北緯21度14分
東経180度

県水産練習船「神海丸」に乗り込み、ハワイ沖で実習に取り組む浜田水産高(浜田市)海洋技術科2年生、関蒼太朗さん(17)＝広島市中区出身＝が船上の日々を記します。

浜田出港後38日目。ハワイ出港から4日たち、神海丸は神奈川県三浦市の三崎港を目指して航行しています。そして今日、私たちは再び日付変更線を越え、「東経」の世界へ戻ってきました。

残念ながら既に日が落ちていたため、日付変更線を見ることはできませんでした。以前この場所を通過してから1カ月たったのだと考えると、時間の流れの速さを実感するとともに、何だか感慨深いものがありました。

ハワイをたってから私たちが何をしていたのかというと、今回の航海で甲板上の至る所にできたさびを落とし、さび止めとペンキを塗っていく作業です。

さび落としは専用のハンマーで優しくコツコツとたたいていきます。そこまで体力を使う仕事というわけではありませんが、南国の日差しの中での作業は気力と水分を奪われますし、私はハワイで陸に慣れてしまい、再び酔いと闘いながら作業をしなければなりませんでした。

三崎まであと10日程度、皆それぞれ自分の将来に向けて努力しています。日本に戻った時、確実に変わったと言えるものができるよう、自分もやるべき事をやっていきたいです。

出典　2024年4月18日付け中国新聞掲載

水高記者DIARY

第十五号

2月27日

北緯22度13分
東経176度11分

船を動かす機関部に圧倒

県水産練習船「神海丸」に乗り込み、ハワイ沖で実習に取り組む浜田水産高(浜田市)海洋技術科2年生、関蒼太朗さん(17)＝広島市中区出身＝が船上の日々を記します。

浜田出港後39日目。日本に近づく中、船内では「交換当直」という取り組みを行っています。私たちの海洋コースと、機関コースの生徒が仕事を交換して知識を増やし、相手のコースに対する理解を深めるためです。

今日は私にとって初めての交換当直。機関室への階段を下り、スリッパに履き替えて制御室に入ります。一つ前の当直からの引き継ぎでは、項目は海洋コースの倍以上！それを聞き取り復唱しなければなりません。

引き継ぎが終わると、早速見回りです。船を動かす主機関や水を作る造水器、発電機や燃料ポンプなど多くの機関が動いています。正常に動いているか確認し、潤滑油の量や色合い、船内に水がたまっていないかもチェックします。

機関室に入ると、まず耳に飛び込んでくるのは機関の動くごう音。耳鳴りがしそうなほどの音の中で作業しますが、これでも耳栓で和らげられている方です。

実際に動く機関を見ると、数々の部品が一つの生き物のように働いていて圧倒されました。室内には温度が３００度を超えるパイプや高速回転する部品もあります。はしゃぎ過ぎないよう、肝に銘じて先へ進みました。

その後は、油こし機の掃除をしたり、機関に関する説明を受けたりして、あっという間に2時間が過ぎ、交代時間になりました。

機関コースの友達によると、交換当直でしたことは一部で、実際にはもっと多くの仕事があるとのことでした。危険と隣り合わせの環境で多くの仕事をこなす機関コースの生徒に、あらためて敬意を抱きました。

しかし、海洋コースの仕事が少ないからといって、おろそかにしていいわけではありません。私たちはそれぞれの職務をきちんとこなしていかなければならないのです。

出典　2024年5月9日付け中国新聞掲載

帰国　何とも言えぬ安心感

水高記者DIARY

第十六号

3月7日

北緯35度8分
東経139度37分

県水産練習船「神海丸」に乗り込み、ハワイ沖で実習に取り組む浜田水産高(浜田市)海洋技術科2年生、関蒼太朗さん(17)＝広島市中区出身＝が船上の日々を記します。

浜田出港後48日目。はるばる太平洋を越え、私たちはついに日本へと帰ってきました。船から見る神奈川県三浦市の景色は、知らないのに何とも言えない安心感がありました。日本のネット環境に戻り、携帯を持った生徒たちが船窓に張り付きました。

税関の審査を受け、マグロをさくにする加工作業を船内で見学した後、三崎港に上陸し、日本の土を踏むことがかないました。曇り、気温7・8度と、この時期にしては肌寒い日でしたが、熱帯の日差しに慣れた私たちにとっては冬の盛りも同然。寒さに震えながらの上陸となりました。

上陸後、みんなが真っ先に向かったのは、岸壁近辺で唯一のコンビニエンストア。私が店に向かった時には、既に実習生が長蛇の列を作っていました。しかも、みんなとんでもない量の買い物をしていました。

これには理由があります。私たちの金銭感覚がハワイで完全に狂ってしまったことと、商品がとても安かったためです。「ジュースが1ドルだ！」なんて言いながら買い物をしました。「海外旅行あるある」とお店の経営努力によって、私たちはコンビニに多大な貢献をしたのでした。

私は次に「うらりマルシェ」という地元の特産品などを扱う店へ行きました。三崎はマグロ遠洋漁業の基地ですから、マグロを使った商品が多くありました。私が購入したのはマグロの串カツ。一緒に行動していたK君もこれを買い、頬張りながら歩いていると、先生と合流し、3人で帰ることになりました。

ここで悲劇が起きました。突如急降下してきたトンビがK君のカツを奪い、そのまま飛んで行ってしまったのです。居合わせた全員があぜんとし、それから笑うことしかできませんでした。

幸先がいいのか悪いのかよく分からない一日でしたが、久しぶりの日本はやっぱりいいものでした。地元を恋しく思う気持ちも大きくなりました。

出典　2024年5月18日付け中国新聞掲載

水高記者DIARY

第十七号

3月13日

北緯34度53分
東経132度3分

２カ月の航海　名残惜しい

県水産練習船「神海丸」に乗り込み、ハワイ沖で実習に取り組む浜田水産高(浜田市)海洋技術科２年生、関蒼太朗さん(17)＝広島市中区出身＝が船上の日々を記します。

浜田出港後54日目。神海丸は約２カ月の航海を終え、浜田に帰ってきました。忙しい中、多くの先生方が岸壁で出迎え、温かい言葉をかけてくださいました。

帰港前日から、船内では下船に向けた準備が進み、私たちは航海を納得して締めくくることができるよう、自分ができることをしてきました。

がらんとしたロッカーや居室を見ると、寂しさ、安堵(あんど)、達成感、いろいろな感情が流れ込んできます。

何よりも大きいのは、この日々が終わってしまったという喪失感です。私はもう神海丸で過ごすことはありません。それが何よりも悲しくてやりきれないのです。

航海を振り返ると、ああしておけばよかった、何でこうできなかったのだろうといった後悔や反省が山のように出てきます。後悔だけはしたくないと思って生活していたはずなのに、下船が怖くて悲しいのです。

ただ、この航海がつまらなかったとか、嫌だったとかいうことは全くありません。２カ月間友と過ごし、多くのことを学んだ経験は、かけがえのない宝物です。この感情は、きっと後悔というより名残惜しさなのでしょう。

航海の終わりでこんな寂しい感情になったのは残念ですが、海が最後に教えてくれた教訓なのだと思います。これからの高校生活に悔いが残らないよう、一日一日を大切に生きたいです。

航海に関わったすべての方に、心からの感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

あとがき

「学生記者」の活動は人生の財産

関　蒼太朗

皆さんこんにちは。この度学生記者として記事を書かせていただいた関蒼太朗です。

まずは、記事を読んで下さった全ての方、本企画をサポートして下さった全ての方に心からの感謝を申し上げます。

今回は、学生記者の体験についてお話しします。この2か月、本当に沢山のことがありました。書ききれなかったことも多くあります。

この企画が生まれたきっかけは、私が2年生になった春にさかのぼります。当時私は、浜田城資料館主催の高校生学芸員という企画に参加していました。発表会で出会ったのが、今回担当をしていただいた中国新聞の記者の方でした。

それからも縁は続き、浜田水産高校ことや、私自身の記事も書いていただきました。そして乗船前の冬休みに「記事を書いてみないか」と声をかけていただきました。

乗船以降、私は船内で起きた出来事を記事としてまとめてきました。船内の空気感や生徒たちの感じた興奮を少しでも伝えられたなら、これに勝る喜びはありません。

ところで、この航海中、私が常に感じていた感覚があります。それは、「縁」です。

船で作業をしている時、勉強をしている時、筋トレをしている時、その全てが偶然で、同時にとてもありがたいことなんだ、そんな気がするのです。ほかの高校に進学していたら、きっと今とは全く違う生活を送り、神海丸に乗ることもなかったはずです。

私をこんな幸せな日々に巡り合わせてくれた縁には感謝しなければなりません。学生記者としての活動は、私の航海を生き生きとしたものにしてくれましたし、これからも人生における財産として私を支えてくれることでしょう。

最後に、私を支えてくれた祖父の言葉を紹介して終わります。

「人生はあみだくじのようなもの。他人の縁であっちに行ったりこっちに行ったり。行き止まりだと思っても、他人がひょいと拾い上げてくれることもある。」

今回の航海で生まれたすべての縁が、永遠に続くことを願っています。

令和六年五月

島根県立浜田水産高等学校にて

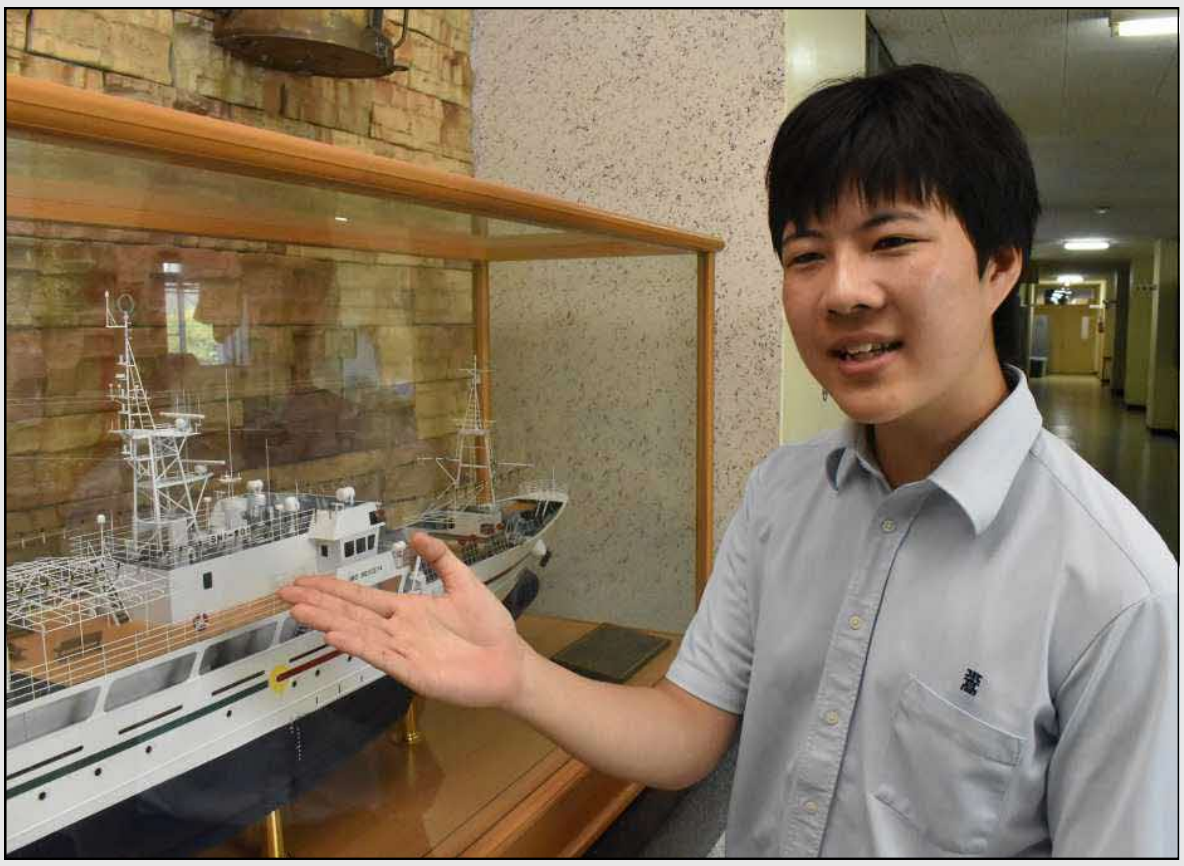
出典　2024年5月20日付け中国新聞掲載

ハワイ航海実習人生の糧

番外編

3月7日

北緯34度54分
東経132度3分



島根県内向け本紙面に「水高記者DIARY」を連載した浜田水産高（浜田市）の海洋技術科3年関蒼太朗さん（17）＝広島市中区出身。1～3月に浜田港とハワイを往復した航海実習を振り返り、多くの命を育む海への関心をさらに深め、自身に続く後輩を待ち望む思いを新たにした。（聞き手・黒田健太郎）

ー2カ月もの航海。不安はなったですか。

1年生のイカ釣り実習でひどく船酔いして、船に乗るのがちょっと怖かった。

でも、今回ハワイへ行く前に（実習へ同行する隠岐水産高＝隠岐の島町＝の生徒を迎えに行く航海で）低気圧の荒れた日本海を経験した。

最初で揺れに慣れたので、そんなにきつくなかった。

ー航海で一番印象的だったことは何ですか。

操業で取ったマグロの生命力。残像ができるぐらいの速さで、ばたばたと尻尾を振り、甲板にたたきつけていた。

そんな生き物が泳いでも泳ぎ切れない広さ、深さを思い知り、海への好奇心が今まで以上に高まった。

海に魅せられ、研究職になりたいという意志が強くなった。

ー航海で成長できたことはありましたか。

2、3回しかできなかった腕立て伏せが、休みながら100回できるようになった。乗り物酔いもなくなり、帰省の高速バスで本が読めるようになった。

自分のできないことに目を向けられた。実習中は自分のことで精いっぱいだった。でも、船酔いで動けない人の役割をさりげなく代わってあげるなど、集中しながら周りも見られる人がいた。すごいと思った。

ーあらためて振り返ってどんな航海でしたか。

貴重な体験がたくさんできた。海の上で何カ月も暮らすことがそうだし、操業も夜の星も日付変更線をまたいだことも。ただ、単独行動をしてしまったり、怒られたりと、後悔もある。

100点満点で言えば70点。

今の記憶を持って今回のメンバーともう一回航海したい。

ー今回の連載がどう生きてほしいですか。

春休みに母校の似島中（広島市南区）へ行ったら、学校に記事が張ってあって驚いた。

今回の連載で浜田水産高に興味を持ち、同じような体験をして、人生の糧としてくれる子が現れてくれたら本当にうれしい。

編集・発行
島根県立浜田水産高等学校
２０２４年６月